

## 『公共スペースの緑化』

(有) 緑花計画 代表取締役 笠 康三郎  
技術士 (総合技術監理部門、建設部門、環境部門)

### ■はじめに

近年になって急に、地球環境だCO2削減だと騒がれるようになったとはいえ、私たちの身の回りの緑の状況にさほど変化があるわけではなく、いやむしろ、緑に関して言えばとりまく環境は悪化をたどるばかりであるというのが、私の現在の偽らざる心境です。

たとえば、街路樹一つを取ってみても、市民の意向はどう考えてもボリュームダウンの方向にしか向かっていないのは誰もが認める現実ではないでしょうか。

もちろん、それがいいと決して言っているわけではありません。まさに各自治体が策定しようとしている『緑の基本計画』では、身近な場所での緑の確保は必然的に強く打ち出されると予想されます。しかし、そのことと、現在本当に求められている緑とは、必ずしも一致しているとは、実の所思えないでいるのです。

### ■公共スペースの果たすべき役割

緑に関しての、住民全体のコンセンサスは、たとえ立派な計画ができたとしても、十分に機能するにはたくさんの努力と時間を必要とします。しかし、行政自らの権限の及ぶ公共スペースに対しては、より明確な形で緑のインフラづくりを推し進めることが大切でしょう。

公共スペースという、住民全体の共有財産については、長期的な展望のもと、子孫に残せる質の高い緑の財産作りを目指すべきであると考えます。その町で成長し、やがて巣立っていったときに、ふるさととして記憶に残る環境を、私達は一体いくつ残してきたのだろうかと思うようになってきました。公共スペースの緑化は、敷地の中だけで完結できるものではなく、周辺の街並みにも、そこに暮らす人の心にも大きな影響を与えるものであるということを心に留めて、緑にかかわるすべての人が努力して行くことが必要であると考えます。

### ■地域の骨格を形成する樹種

植栽に使われる樹木にも様々な種類がありますが、最近の現場を見ていると、花とか実とか、いわばみしてくれの良さに目を奪われて、本質的な資質に注意を払っていないような気がしてなりません。公共スペースにおける緑化では、地域の骨格を形成する豊かな緑が要求されますが、みしてくれはよくてもあまり寿命の長くない木や、ボリューム感に欠ける樹木では、このような目的を十分に果たすことは難しいのではないのでしょうか。

私は、その地域の骨格を形成するような樹木のことを、**基調樹種**と呼んでいます。その場所における最も環境に適した樹種であり、50年、100年、あるいはそれ以上長く生き続けることのできる樹種を指しています。

低地であれば、ハルニレやヤチダモ、トチノキやカツラなど、水分を欲しがるとなる樹木となります。最近では、都市内の乾ききった場所や造成地など、乾燥する空間が増えてきていることから、そのような場所に対しては、シナノキやオオバボダイジュ、カエデ類やナラの類などがこれに当てはまります。(もちろんこれに対応する外来種もたくさんあります)

それに対して、木はそれほど大きくなり、花や実や紅葉など、見た目はきれいな樹種を**添景樹種**と呼んでいます。サクラ類やナナカマド、モクレン類やライラックなど、庭木として利

用される樹種が多いのですが、えてして病虫害や気象害などに弱く、寿命が短かいため永続性という点にはやや欠けるのが特徴です。

緑化樹種にはこのほか、できるだけ早く緑化を進めるために、やせ地に強く生長の早い樹種を用いることがよくあります。これらは**早生樹種**とか**先駆樹種**と呼んでよいと思いますが、ヤナギ類、ニセアカシア、カンバ類、ハンノキ類、ポプラ類などが含まれ、治山や砂防の現場だけでなく、身近な造園の現場でもかつてはよく用いられました。しかし、そのたくましさがかえってあだとなり、最近ではむしろ迷惑がられることの方が多くなってきています。

最近の緑化の現場では、用いられている樹種はこれらのうち添景樹種であることが多いように感じています。確かに花が咲き、実がきれいで、紅・黄葉もする樹種を植えることは大切なことです。しかし、これらの樹種だけで構成された緑は、北海道の厳しい環境条件の中では、徐々に活力を失い、建物が朽ちてゆくように傷んでしまうことが多いのです。

このため、その土地の環境条件に最も適した基調樹種で緑の骨格を作り、その周りに修景効果の高い添景樹種を植栽すること。極めて厳しい環境条件下では、まず早生樹種で緑の防護壁を形作った上で、次の緑化を考えること。といった緑づくりのテクニックが、本物の緑を作る上で大切なのではないのでしょうか。

### ■厚みのある緑づくり

最近の公共施設の外構では、駐車スペースの確保が最大の命題ようになってしまい、植栽スペースは周囲のほんの一片にわびしく列植する程度、で終わってしまうことが多くなっているように感じています。公園や学校にしても、中央に広場や運動場を設定すれば、どうしても植栽はぐるり一回りで終わってしまうのが普通です。列植や幅の狭い植樹帯の緑は、強風や乾燥などの厳しい環境条件に耐える力が弱く、またその木が本来育つべき大きさにはとても成長できないことが多いのです。単調な樹種構成では、病虫害の発生に対しても弱いことが多く、共生する昆虫や野鳥など、多様な生態系を創り出すこともほとんどできません。

私有地でまとまった緑を確保することができない現状では、公共空間の果たすべき役割はますます大切になってきています。意識的に厚みのある緑、生態的に多様な緑を作っていく姿勢も必要な時代になってきていると感じています。

### ■四季の変化を考慮した配植

北国での四季の変化は想像以上にはっきりしており、植栽の計画に当たっても、春には生命の躍動を感じられるよう、夏には瑞々しい緑のシャワーを、秋には散りゆく前の色彩の乱舞をうまく表現し、この特徴をうまく生かすことが大切です。

北海道では、樹木に葉がついている期間は5月から10月までのわずか6か月間しかありません。耐寒性のない常緑広葉樹を欠いているために、このグレイーズンにも植栽の効果を上げるためには、常緑の針葉樹の効果的な使用が大切なポイントになります。落葉広葉樹の春の芽出し、新緑や、秋の黄紅葉は、常緑針葉樹の濃い緑とのコントラストの上で、より効果的に演出できることも忘れてはならないことです。

庭の中に大きくなる常緑樹を植えることが難しくなっている現状をふまえ、公共空間の緑化では、あらかじめ常緑樹の比率をある程度定め、計画的に常緑樹を導入して街並みに少しでもうるおいを与えることも検討すべき課題であると考えています。

北海道でよく使われる常緑の針葉樹は、大きく分けて次の2つのタイプがあります。

一つは、柔らかい丸みを帯びた樹形を持ったマツ類やニオイヒバ、サワラなどといった、マツ-ヒバ型の樹種です。もう一つは、北国特有ともいえる、ブンゲンストウヒやアカエゾマツ、

トドマツといった、いわゆるクリスマスツリー型のシャープな樹形を持ったモミトウヒ型の樹種です。

これら2つのタイプの樹種は、混在させず、どちらかに統一することによって、建物周辺の雰囲気作りに大きな影響をもたらします。地域の特性や、除雪の影響、歩行者との関係、周囲の落葉樹との関係などをよく考えて、いずれかを選択するとよいと思います。

### ■管理を考慮した配植

建物の周辺では、日陰や落雪、吹き溜まりなどといった建物自体が原因となる要因に加えて、踏圧や除排雪といった人間活動の密度が高いことから、植物を良い状態で生育させるには、維持管理に十分に配慮をしておくことが大切です。これからの時代には、管理費をできるだけ抑制してゆくことが大きなポイントになってきますので、特に冬囲いや、刈り込みなど、手間のかかる配植をしてしまうと、後々の管理で悲鳴をあげることになってしまうのです。

私は、特に建物の周囲の修景には、ツツジ類などの低木は極力使わないようにしています。

その代わりに使用する植物として、モンタナハイマツやキンロバイ、ハマナスなどの冬囲いの要らない耐雪性の低木類や、ミヤギノハギやシラハギなどの冬に地上部の枯れる草本性のハギ類、ヘメロカリスやギボウシ類、フッキソウ、コトネアスターなどの地面を低く覆うグラウンドカバープランツ（地被植物）の仲間を多用しています。

それぞれ種類や品種の導入が進んで、様々な環境条件に対して選択の余地が広がってきたこと、生産体制が確立され、供給が容易になってきていることなどの点で、以前のような不安定さがなくなってきました。ある程度のイニシャルコストをかけても、将来的に重荷となるランニングコストを極力抑制することも、これからは大切になってくると思います。

### ■生育基盤の改善

最近の土木機械による造成地では、そのまま植栽しても生育不良になることが少なくありません。植物の生育に欠かせない、根を張り巡らせる土壌の条件が、著しく不良になっているケースが増えてきています。ある程度整地して、芝を張ってしまうと、見かけはいいように思えても、土壌の中身は劣悪な場合が実際には非常に多いのです。

植物を植える場合の土壌条件の改善は、植栽作業では必須条件であり、一旦植栽した後で土壌改良をやり直すことが難しいことを考慮すると、とかくしわ寄せのいきやすい植栽への金額の中で、土壌改良の費用をあらかじめ最低限確保しておくことも、これからは非常に大切なことであると思います。

緑が所詮添えものかどうかは、実は私達が決めることではなく、後々その場所を利用したり、その場所で生活する人が決めることであると考えています。私達の作り出す環境が、一人一人の心に何かを残していけるようなものとなるよう、これからも努力してゆきたいと考えています。

(りゅう こうざぶろう)

1952年、四国松山生まれ。北海道大学農学部卒業後、園芸コンサルタント、札幌市緑のセンター、(株)スペース・デザイン工業を経て、現在日本データサービス(株)技術顧問、(有)緑花計画 代表取締役。一級造園施工管理技士、技術士(総合技術監理部門、建設部門、環境部門)。

## 道内で使われる主な緑化樹木(中高木性)の区分 (笠私案)

樹種区分	基調樹種		添景樹種		早生樹種	
	在来種	移入種・外来種	在来種	移入種・外来種	在来種	移入種・外来種
針葉樹	アカエゾマツ	イチョウ	イチイ	アカマツ		カラマツ
	キタゴヨウ	コンコロールモミ		カイヅカイブキ		ヨーロッパトウヒ
	トドマツ	チョウセンゴヨウ		クロマツ		
		プンゲンストウヒ		ゴヨウマツ		
		ヨーロッパアカマツ		ストローブマツ		
		ヨーロッパクロマツ		ニオイヒバ		
				バンクスマツ メタセコイア		
樹種区分	基調樹種		添景樹種		早生樹種	
	在来種	移入種・外来種	在来種	移入種・外来種	在来種	移入種・外来種
広葉樹	イタヤカエデ	アカナラ	アオダモ	ウメ	アキグミ	ウンリュウヤナギ
	オオバボダイジュ	ケヤキ	アズキナシ	エゴノキ	ケヤマハンノキ	シダレヤナギ
	カシワ	プラタナス	イヌエンジュ	エゾノコリンゴ	シラカンバ	シンジュ
	カツラ	ユリノキ	エゾヤマザクラ	キササゲ	ドロノキ	ニセアカシア
	コナラ	ノルウェーカエデ	キタコブシ	ギョリュウ		ネグンドカエデ
	シナノキ	サトウカエデ	ツリバナ	サトザクラ		ポプラ類
	トチノキ		ナナカマド	ソメイヨシノ		クロポプラ
	ハルニレ		ハウチワカエデ	ナツツバキ		改良ポプラ
	ブナ		ハクウンボク	ノムラモミジ		ギンドロ
	ホオノキ		ハシドイ	ハクモクレン		
	ミズナラ		マユミ	ヒメリンゴ		
	ヤチダモ		ヤマグワ	ベニバナトチノキ		
			ヤマモミジ	ヤマボウシ		
				ライラック		